

最終回  
脊振中学校

# 私たちの学校自慢

この連載は、市内の小中学校を訪ね、他の学校には負けないという「学校自慢」を子どもたちに紹介してもらおうコーナーです。



最終回は、脊振中学校です。生徒会会長の中川真誠さん、副会長の宮地遥菜さん、書記会計の森崎香奈さん、一番ヶ瀬亜美さん、学習部長の森田育子さん、広報部長の井上絢水さん、保健部長の弥富龍之さん、体育部長の中村圭一郎さんの8人に話を聞きました。

## この学校の自慢は何ですか？

- 中川さん 「仲が良いところ」
- 宮地さん 「礼儀正しい」
- 森崎さん 「学校で仲が良いこと」
- 一番ヶ瀬さん 「元気なあいさつ」
- 森田さん 「みんなが協力するところ」
- 井上さん 「何事にも積極的」
- 弥富さん 「全部恵まれている  
(環境、地域の人など)」
- 中村さん 「自然に囲まれていること」

## 樹人の教え 受け継ぐ



一見バラバラの意見に見えますが、脊振中学校の校訓「和気、立志、報恩」につながるものがあります。

脊振中学校の校舎は「樹人舎」と呼ばれています。これは脊振小学校の折にも触れましたが、村長を務めた徳川権七の言葉「百年の計は人を樹うるにあり」にちなんだもので、人材育成の願いが込められています。

現在の校舎は、平成元年に「村の学校建築こそ村の材木を村の人で」との信念で建設されました。校訓は、その時の津山剛校長と生徒達が話し合って決めたそうです。その中の報恩には「他人から受けた恩に報いること。樹人舎で学べる事への感謝」という意味があるそうです。教育と同時に脊振には奉仕の精神も受け継がれています。



脊振学園で行われた鉢植えのボランティア活動

昭和11年11月19日。フランスの冒険家アンドレ・ジャビー氏の乗った飛行機が脊振山中に墜落しました。現場は霧で視界が悪く急斜面でしたが、危険を覚悟で、初めて見る外国人を救助。適切な判断で大病院へ搬送し、命を救いました。村人の献身的な行いは海外にも報道され、多くの人を感動させました。

この精神は現代にも脈打ち、脊振山清掃登山、ベルマーク収集、そよかぜ荘訪問などボランティア活動にも生徒全員が積極的です。自慢の一つとして出てもおかしくないのですが、生徒にとっては、ごく自然のことのようです。

3年生からバトンタッチされた1、2年生の生徒会役員たち。今後の目標は「今まで以上に明るいあいさつとボランティア活動に力を入れる」とのこと。徳川権七が百年前に夢見た想いは、着実に実を結んでいるようです。

脊振中学校の自慢は「樹人の教えとボランティア精神」と言えるでしょう。



## 校長先生から一言

脊振で育ち、脊振中で学んだことに対し「自信と誇り」を持つてほしい。すべての活動に積極的に取り組みましょう。

脊振中学校 校長 吉川 正志